

コレスポネンス分析を用いた北陸新幹線開業後の観光動態分析 ～和倉温泉・七尾地域を対象として～

金沢大学大学院 自然科学研究科環境デザイン学専攻 学生会員 ○仕明 祐人
 金沢大学 理工研究域環境デザイン学系 正会員 藤生 慎
 金沢大学 理工研究域環境デザイン学系 フェロー 高山 純一
 金沢大学 理工研究域環境デザイン学系 正会員 中山晶一朗

1. はじめに

北陸地域には、歴史的風情の漂う町並み(金沢市・高岡市)や名湯(宇奈月・和倉・加賀・芦原)、由緒ある寺院(瑞龍寺・那谷寺・永平寺・総持寺)、美しい山々(立山・五箇山・白山)、荒々しい海岸(東尋坊)、海産資源等といった豊かな観光名所・観光資源が多く存在しており、誘引力の高い観光地域である。加えて、白川郷や飛騨高山への容易なアクセスが可能であり、立地条件の良さも観光地としての一つの魅力である。また、2014年3月14日の北陸新幹線開業に伴い、当地域は国内旅行目的地として、今、国内外から高い注目を集めている。

昨今、数多くの国内観光振興地域が、「観光インフラ整備」や「通過型から宿泊旅行への転換戦略」、「ブランドイメージ戦略」によって旅行者の滞在時間の引き伸ばしやリピーターの獲得を目指す中で、当地域もこれらを目指す必要があると言えるだろう。

そこで、本研究では、観光促進における課題検討の一助を目的に実態を明らかにする。

2. 既存研究の整理と本研究の位置づけ

観光分野に関する研究では、観光消費や満足度、交通量に関する研究が多く存在する反面、旅行者意識・行動に則した地域連携、周遊観光に関する研究は少ない。そこで桑子¹⁾らは、周遊観光における広域地域の出入口数と観光行動の関係性に着目し、設定した複数のトリップパターンに含まれる観光施設の質を向上した場合の便益を明らかにした。また、森川²⁾らは、周遊観光交通の時間推移・滞在時間をモデル化し、旅行者の複雑な意思決定に則した行動をマイクロシミュレーションによって予測した。

以上の論文はほんの一例であるが、周遊観光分析において、新幹線開業前後における旅行意識に則した観光実態を明らかにした既存研究は存在しない。

そこで本研究では北陸地域旅行者を対象としたアンケート調査によって、新幹線開業前後における観光動態・観光意識を調査し、様々な分析方法から旅行者の傾向把握や観光ターゲットの明確化を行った。

3. アンケート調査の概要

アンケート調査の概要を表-1に示す。配布方法は温泉宿泊旅館・ホテルのフロントにて、おおよそ手配布で行った。全て温泉宿泊旅館・ホテルの宿泊客を対象に無作為に配布し、後日郵送回収の形式で行った。

また、調査には2種類のアンケートを用意した。一方はサンプル数の確保を目的とした簡易版アンケートである。調査項目は、概ね回答者属性と旅行動態であり、主にカテゴリ選択形式である。新幹線開業5ヶ月前から開業後12ヶ月間の合計17ヶ月間で配布を行った。もう一方は詳細版アンケートであり、調査項目は、回答者属性や旅行動態に加え満足度・観光地評価・重視度等の数量データを調査した。

回収率は、簡易版アンケートが7.44%、詳細版アンケートが3.16%であり、想定よりも大きく下回る結果であった。要因としては、アンケートの配布を依頼している宿泊宿において、本調査以外の依頼が殺到したためと考えられる。

4. コレスポネンス分析

対象の好みの傾向を把握する分析に有効であるコレスポネンス分析を用いて、旅行者の訪問回数や属性別に「観光地」、「土産処」、「食事処」、「体験」、「和倉周辺観光地」、「季節」で好みの傾向把握を行った。また、役所職員にも同調査・同分析を行い、比較することによってターゲット層のズレを考察した。一例として、「観光地」の分野における比較を図-1と図-2に示す。

表-1 アンケート調査の調査概要

	簡易版アンケート	詳細版アンケート
調査期間	2014年11月 ～2015年3月	2015年4月 ～2016年3月
配布場所	和倉温泉宿泊宿 七尾温泉宿泊宿	和倉温泉宿泊宿 七尾温泉宿泊宿 能登小牧台 能登島
調査対象	旅館宿泊客	旅館宿泊客
調査方法	手渡し配布 後日郵送回収	手渡し配布 後日郵送回収
調査項目	旅行目的 同伴者 旅行人数 滞在期間 利用交通 居住地 旅行頻度 訪問回数 予算 性別 年齢 職業 -	旅行目的 同伴者 旅行人数 滞在期間 利用交通 居住地 旅行頻度 訪問回数 予算 性別 年齢 職業 前泊地 後泊地 訪問地 訪問施設 食事 参加イベント 訪問動機 既訪観光地 観光季節意識調査 レポート意識 観光満足度 観光ニーズ
配布枚数	20500枚	10000枚
回収率	7.44%	3.16%

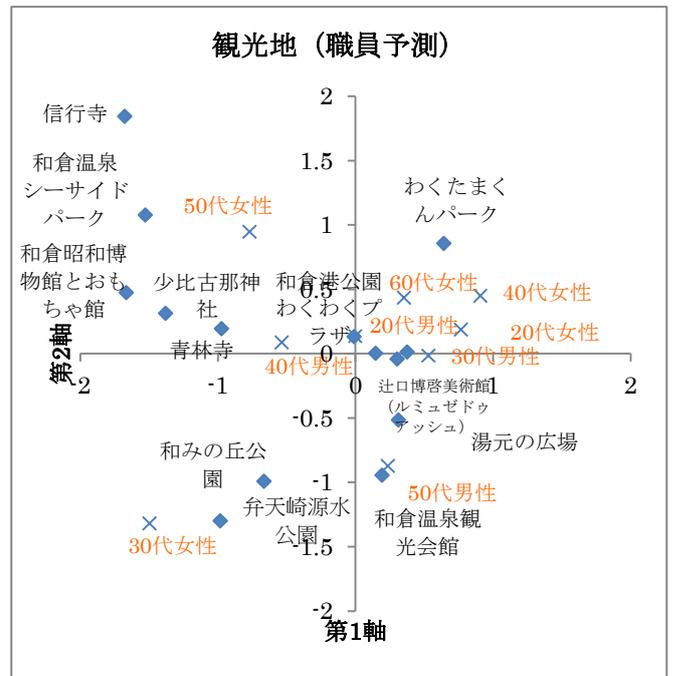


図-2 コレスポネンス分析 (職員予測)

図-1 より、旅行者は年齢によって好みの傾向が分かれることがわかった。若者は複数人で訪れる体験系の観光地を好み、高齢者は少人数で訪れる文化系の観光地を好んでいることがわかった。

一方、図-2 より、職員は性別によって好みの傾向が分かると予測している。男性は複数人で訪れる現代的な観光地を好み、女性は少人数で訪れる現代的な観光地を好むと予測している。

従って、観光地別にターゲットとなる年齢層を把握し、対応することが満足度の向上やリピーターの獲得に大きな影響を与えると言える。

5. 主成分分析

対象が、何に魅了されているかの因子把握に有効である主成分分析を用いて、旅行者の訪問回数や属性性別に「観光地」、「土産処」、「食事処」、「体験」、「和倉周辺観光地」、「季節」で因子把握を行った。結果については、是非、講演時に発表したい。

6. 参考文献

- 1) 桑子幹弘, 河野達仁, Iis P. Yussyadiah : 周遊観光における観光施設の質改善便益分析, 第 42 回土木計画学研究発表会・講演集, 2010
- 2) 森川高行, 佐々木邦明, 東力也 : 観光系道路網整備評価のための休日周遊行動モデル分析, 土木計画学研究・論文集 No.12, 1995

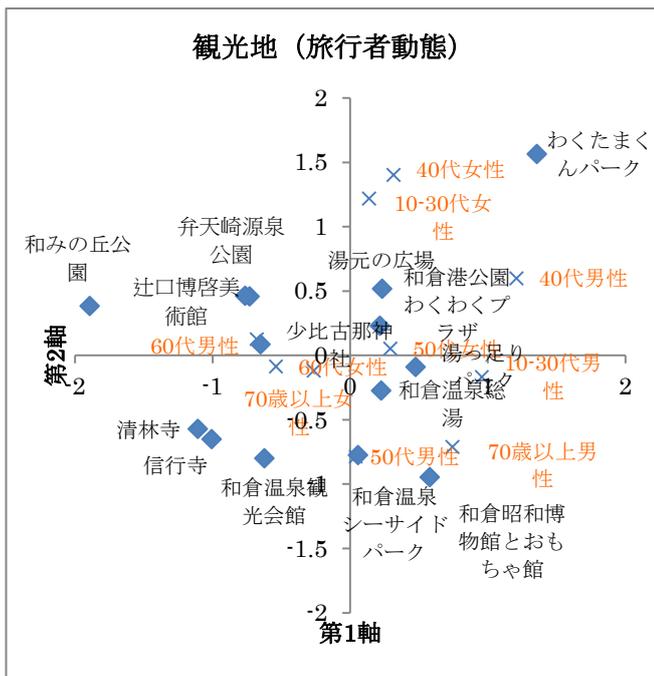


図-1 コレスポネンス分析 (旅行者動態)